

西穂高岳遭難(1968年7月)

女性二人は、赤いペンキの道標に従って進んだが、民有林と国有林の境界標識だった。間もなく熊笹の藪につかまり、二人は、それぞれバラバラになった。上高地に下っているつもりが、飛騨側へ下っており、一人が工事現場の近くをフラフラ歩いていたところを発見された。その後、飛騨側を中心に搜索したところもう一人も無事発見された。



解説

全くの登山の素人の女性二人。朝宿を出た時には、西穂山荘まで行くつもりはなかった。河童橋で登山者と会話をして、その日の行動を決めてしまった。西穂山荘に着いた時は予想以上に時間を費やし、すぐに下山をしようとした。同じ道に戻ればよいのだが、素人の二人は上高地までの道は一つしかないと思っていたので、目の前の道を赤いペンキ塗りの道標を頼りに、飛騨側の方へ進んだ。しばらく行くと藪につかまり、バラバラになり道迷い遭難に陥った。

二人が上高地から入山していたので、搜索隊は、上高地側を集中的に搜索していたため、見つからなかった。自力下山を一人ができた為、もう一人も探すことができた。

登山経験の無い素人が、思いつきで行動した結果が今回の遭難につながった。登山計画書の提出が叫ばれている今日は、こういった「思いつき登山」が減少することを願っている。今回の事例は、「思いつき登山」撲滅への事例として紹介したい。

なお、後日談があり、遭難の翌年二人の女性が「西穂高岳の遭難現場を見に行く」と自宅に書き遺して、入山したが、彼女たちは二度と帰ってこなかった。土砂に埋もれた二人の遺体が外ヶ谷の上流部で発見されたのは、行方不明になってから1年以上経過してからだった。「思いつき」や「好奇心」で登山をしてはいけない教訓として肝に銘じたい。